

令和6年度 学校経営報告書（自己評価）

学校番号	20	学校名	静岡県立浜北特別支援学校	校長名	八幡 正信
------	----	-----	--------------	-----	-------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
ア	個性を生かし確かな成長を感じられる教育活動を進める。	「教育課程の押さえ」を踏まえ、学校全体の調和を図り、学部間／学年間の系統性を実現する教育課程が編成できたと考える教員 100%	学年経営や授業づくり、児童生徒の個別指導計画の作成・評価などに際し、「教育課程の押さえ」や学習指導要領に目を通して、教育活動に活かした。 98.0%	A	【成果】 ○教科担当者等で教育課程や年間指導計画の検討をしたことで、系統性のある授業づくりができ、目標の明確な授業を行うことができた。 ○カリキュラム・マネジメント推進委員会での検討を中心に、学習指導要領を根拠として、学部会や学年会等での系統性を意識した年間指導計画の見直し・作成・検討がどの学部でも進められた。 ○アセスメントツールを基にして学年やグループで生徒の実態や目標について検討し共通理解することで、目標を明確にした授業づくりや児童生徒の達成度の評価をすることができた。 ○各課が連携して研修・学習会を行ったことで、適切な実態把握・目標設定の理解が進んだ。 ○「個に応じた目標設定・学習評価」のテーマに沿って研修を重ねたことで、評価規準／基準を設定した授業実践と学習評価に取り組むことができた。 ○ICT研修を基に既存のアプリの活用を工夫したことで、調べ学習だけでなく学習の振り返りや会の司会進行等にもICTを活用することが増え、児童生徒が見通しや自信を持って学習や役割に取り組めた。
			学習指導要領や教育課程の押さえ、ラーニングマップ等を活用することで、年間指導計画を作成し、授業等の実施、見直し、修正等ができた。 96.3%		
			体育課の作成した教育課程や各領域の押さえを基に、児童生徒の実態に合わせた授業内容を検討し実施できた。 90.5%		
		児童生徒の発達段階を把握し、学習によって身に付けた力を評価規準／基準に沿って適切に評価できる教員 100%	学習指導要領や自立活動目標分析シート等を用いて根拠ある適切な実態把握と目標設定を行い、児童生徒の目標達成率が8割以上であった。 96.7%		

			自立活動個別の課題（自立A）、国語・算数（小生活／自立B）、国語・数学（中生活／高職業／自立B）の授業において、ラーニングマップまたはアセスメントチェックリストを活用した実態把握を基に評価規準／基準を設定して授業づくりを行い、子どもの学習状況を評価することができた。 96.3%		○ICTを活用することで授業に興味を持ったり、生徒自身でできることの幅が広がったりした。 【課題】 ○6年間のつながりを確認することはできたが、実践の中でつながりを意識して取り組むことが難しかった。 ○適切な実態把握や学習評価ができていないかどうか自信を持てなかったり、授業の振り返りを十分に行えず次の授業に生かし切れなかったりする教員もいる。 ○ICTが便利であることは分かったが、教師の苦手意識や抵抗感・不安感を拭い切れない現状がある。 ○重度の児童生徒へのICT活用について、悩みや勉強不足を感じる教師もいる。
		児童生徒がICTを活用して自ら学習に取り組むことができたと考える教員 100%	児童生徒が自らICTを活用して学習に取り組むことができた。 80.2%		
イ	具体的な将来像をより明確にした地域で生きる力を培う。	自立活動の区分により児童生徒の実態を把握し、個別の教育支援計画の立案と評価に生かすことができた教員 100%	児童生徒の長期目標や短期目標、指導方法を検討する際に、学習指導要領に目をとおしたり、職員同士話をしながら実態把握や目標の立案をしたりした。 99.4%	A	【成果】 ○自立活動目標分析シートを用いて児童の実態を学年教員で整理し、児童生徒に合った支援計画の立案を行うことができた。 ○自立活動の実態把握についての職員参加型の学習会を開くことで自立活動についての職員の意識をおおむね高めることができた。 ○定期的な振り返りで、児童生徒がキャリアパスポートの目標やそれに関連した日々の目標を意識して取り組めた。 ○他学部の様子を知り、自分の学部へ持ち帰ることで、他学部との系統性を意識した指導を考えることができた。 【課題】 ○自立活動の考え方や児童生徒の実態の分析についてのより深い理解が必要。
			自立活動の区分をもとに児童生徒の実態把握をし、個別の教育支援計画の立案や評価を行うことができた。 98.8%		
		キャリアパスポートで設定した目標を達成できた児童生徒 100%	キャリアパスポートで設定した目標を達成できるように、児童生徒へ日々の働き掛けを工夫した実践を行うことができた。 94.6%		

様式第3号

		他学部との系統性や接続を踏まえて目標設定し、指導できた教員 100%	学部間交流をしたり、学部間交流をした教員の報告を聞いたりして、他学部との系統性を知る機会があった。 95.4%		○キャリアパスポートについて、自分で振り返ることが難しい児童生徒の活用の仕方が難しかった。 ○他学部の授業を見に行く機会はあるが、その機会を教員が意識して活用する。 ○交流のために教員が減ることで、所属学年に負担が掛かった。
ウ	お互いが人を大切にして、笑顔に満ち溢れた学校生活を実現する。	相手を意識して自ら笑顔で挨拶ができた児童生徒、教員 100%	自分なりの方法で相手を意識して笑顔で挨拶ができるように指導し、児童生徒の行動に結び付いた。 99.2%	A	【成果】 ○教師が率先して礼儀正しく挨拶することで、児童生徒も明るく丁寧な言葉遣いで挨拶することが増えた。 ○教師が率先して人権に配慮した関わり方をしたり児童生徒の良いあらわれを賞賛したりしたことで、児童生徒も適切な関わり方ができるようになってきた。 ○重大ないじめまで発展する前に対処できた。 ○いじめにつながりかねない案件があるときは学年教員間で早めの情報交換、クラスを超えた早めの指導をしたことで対応することができた。 ○児童生徒の実態や興味関心に合った活動や学習環境を作ることに努めたことで、児童生徒の心地良い表情や意欲的な姿を引き出すことができた。 ○児童生徒が運動会やけやき祭に自信を持って取り組む姿、笑顔で取り組む姿が見られた。 【課題】 ○いじめの概念の理解が難しく、いじめと成りうる言動がある児童生徒について、必要に応じて早めに対応することが必要。
			教員自身が相手を意識して笑顔で挨拶をすることができた。 100%		
		重大ないじめ 0	望ましい人間関係ができるように指導・支援をし、いじめにつながる行動を見逃さなかった。 99.2%		
		居心地の良い学習集団を目指し主体的に取り組むことができた児童生徒 100%	居心地の良い学級／学年／学部を目指して主体的に取り組んだ。 91.0%		
		学校は楽しい、学校に行きたいなど学校が居場所になっていると答える児童生徒 100%	「学校は楽しい」「学校に行きたい」など、学校が居場所になっている。 93.3%		

エ	明確で実 際のな危 機管理・ 安全体制 を整備す る。	危機管理マニュアルを活用し、主体的に行動できた教職員 100%	災害時の自分の班での役割や動き、物の場所を明確に理解でき、避難訓練は災害に応じて臨機応変に行動できた。 99.0%	A	【成果】 ○防災について、定期的に自分の役割や物の確認などを話し合う機会を設けることで、自分事として捉えて話し合うことができた。 ○物の配置や動線を整理して、児童が安全に活動できるようにした。 ○教員間の声掛けや日頃からの情報共有をしっかりと行ったことで、大きな事故を未然に防ぐことができた。 ○医療的ケアにおいて起きたヒヤリハットについて、関係者で協議したり、医療的ケア検討委員会で話し合ったりして対策を共有し、再発を防止することができた。 ○繰り返し取り組んでいることで、避難訓練時の避難行動が身に付き、できるようになった児童生徒が増えた。 ○手洗いの強化週間を設け、様々な仕掛けを準備し、興味関心が持てるよう工夫できた。 ○保健学習によって生徒が、水分補給や手洗いといった予防する行動を継続して実施できるようになった。 ○定期的に登下校指導をすることで、教員も生徒も事故に対して気を付けることができていた。 【課題】 ○災害に対する教職員の体制について、定期的な役割の確認が必要と感じた。 ○衛生行動について、児童生徒の実態によって、促すだけでなく「自分から」取り組める姿勢を育てたい。 ○トイレの後の手洗いが不十分な子がいる。
			緊急搜索訓練での自分の役割を理解し行動できた。 98.0%		
			ハリーコール時の自分の役割がわかり、マニュアルに沿って行動できた。 99.0%		
		医療的ケアを含むヒヤリハットの活用による重大な事故0	ヒヤリハット報告や事後の振り返りを生かして、校内での安全対策や安全指導を行い、重大な事故を防いだ。 100%		
			医療的ケアや保健・給食でのヒヤリハット報告や事後の振り返り、掲示板等での啓発を生かして、校内での事故防止を意識し、重大な事故を防いだ。 100%		
		自分の命や健康を自分で守るための取組ができた児童生徒 100%	「自分の命を自分で守る」ための授業（訓練の事前事後指導を含む）を実践し、児童生徒の行動に結び付いた。 98.0%		
			手洗い、消毒等の感染症対策の指導を行い、児童生徒が自分から感染症対策を行ったり受け入れたりする行動に結び付いた。 96.8%		

			体育活動時に想定される怪我や事故を防ぐために、安全体制や自分を守るための指導方法を検討して授業を行うことができた。 95.2%		○課題として、防災フォルダの活用方法を具体的に周知できていなかった。 ○通学時に自損事故が2件起きてしまった。 ○通学途上の事故にはつながらなかったが、交通ルールや携帯電話の使用に関するルールを守れない生徒がまだいる。
		通学途上の事故0	想定される危険や安全な行動について指導し、通学途上の事故0につながった。 96.6%		
オ	地域等とネットワークでつながり、共生社会の実現を目指す。	地域等の「人・もの・こと」とつながる取組を実現した学年／学部／分掌 100%	地域ボランティア、多様な人材等を活用することで、地域の「人・もの・こと」とつながる教育活動を実践することができた。 99.4%	A	【成果】 ○授業での地域探索、けやき祭や秋祭り、挨拶委員会でのけやきの会やしゃべらまい会との関わり、学校間交流など地域と関わる活動を通して、児童生徒が喜びや楽しさを感じながら意欲的に取り組むことができた。 ○地域への販売や清掃活動等を行うことで自分の製品が売れた達成感や清掃をしたことによる感謝の言葉をいただき、うれしそうな姿が見られた。 ○発表補助、遊びコーナー運営として参加していただき、それらを通してけやきの会の方々と触れ合いながらけやき祭を実施したことで、児童が興味をもち、楽しんでいる様子を見ることができた。 ○学校間交流では、児童生徒の実態に合った活動を設定したことで、自信を持って自分から学校を紹介したり楽しみにしたりするなど、主体的に交流することができた。 ○交流籍校交流では、相手校とのやり取りを丁寧に行い児童に合った内容を設定することで不安が軽減し、安心して取り組むことができた。
			地域とつながる活動について、校内掲示、学校だより、SNS等を通じて知ることができた。 98.4%		
			ホームページやSNSを活用して教育活動を計画的に配信した。 93.5%		
		けやき祭（学習発表会）の再開	けやき祭（学習発表会）を再開させることができた。 100%		
		双方の成長を促した交流活動ができたと考える教員 100%	交流(学校間交流、交流籍交流)の目的や各学部の取り組みが分かり、双方の成長につながる交流活動ができた。 99.2%		
		児童生徒の支援ニーズを的確に把握し、課題解決に向けて関係機関と連携できたと考える教員 100%	自立活動の外部研修や自立活動だよりによる情報発信が、日々の指導の参考となった。 99.2%		

			保護者、関係機関と連携して、産業現場等における実習の打合せや就労アセスメント、移行支援会議を実施し、具体的な対応に結び付いた。 100%		○支援会議、ケース会議等を活用して児童生徒の実態を共有するなど、様々な機関との連携を図ることができた。 ○情報提供については、自立活動だよりの発行を定期的に行い、PT、OT、ST研修で出た話題を教員間で共有した。 ○夏休みを活用して、89人の保護者が福祉施設の見学をすることができた。 ○Instagramの投稿・稟議をタブレット端末でできるようにしたことで、投稿が簡素化された。 【課題】 ○外部サポーターとの目的や役割の共通理解には事前の打ち合わせに工夫が必要。 ○学校間交流について準備段階でのお互いの教師同士の打ち合わせに工夫が必要。 ○交流籍交流では、相手校との連絡や保護者との連携、事後の掲示作成等、担任の負担が大きい。 ○福祉サービスや各機関の役割等について教師が知識を持つことも必要。 ○学年主任や特別支援課との情報共有を密にして、必要な時に迅速に関係機関と連携していけるようにしていく。
カ	業務上の役割を果たし、貢献するとともに、業務の効率化を図る。	自信と根拠を持って業務に取り組むことができた教員 100% 所属部署内／所属部署間が協働することで、本校で働くことができて良かったと感じる教職員 100%	防ぐことができる情報機の紛失、破損が0であった。 96.5%	A	【成果】 ○月ごとのモラルスローガンの発信や、破損等への注意喚起を速やかに取り組むことができた。 ○教員同士で日常的に対話をし、相手や自分の良さ・得意を知ったり、気軽に相談したりすることができた。学級や学年のチーム力が高まった。

			年間の業務に対し、自分自身で見通しを持ったり学年内（分掌内）で共有したりしながら、業務内容、業務環境を工夫、改善することができた。 100%	○話しやすさや相談のしやすさのある学年やグループの関係づくりができ、お互いに助け合って業務に向かうことができた。 ○担当者同士で協力して、業務を効率的に進めることができた。 ○安全点検簿では、パソコン上の共有ドライブを活用したことで、点検状況の集約の結果が分かりやすくなった。 ○掲示板や職員研修等で得たコンプライアンスに関する情報を自分事として捉えて指導や自分の言動を見直し、不祥事を防ぐことができた。 ○業務の効率化に対する取組は多く行われており、効果もあったように感じた。 【課題】 ○教材室や教材備品類の利用マナーが良くない時もある。 ○会議や作成物等、業務に見合う時間の想定や優先順位の決定が適切にできるとよい。 ○マニュアルを必要なときにすぐ見ることができないことがあった。 ○日頃から教員間でのコミュニケーションを大切にし、気になることを気軽に言い合える人間関係を築いていきたい。 ○多くの職員から率直な意見や具体的な改善策を吸い上げ、職員全体で考えていくようにしたい。
			学校の資源（教材、材料、図書等）を大切に扱い、学年学部の授業づくり（準備）や分掌業務等で有効活用することで、効率的に働くことができた。 99.4%	
			交通安全や人権教育の教材を使用し、効率化を図れたと感じた。 95.4%	
			危機管理マニュアルや安全点検簿のデータ化などICTを活用した業務で、効率化につながった。 99.1%	
		不祥事0	教育公務員としての自覚を持ち、コンプライアンスを守って行動できた。 100%	
		年間時間外勤務 360時間以内 100%	4月～11月現在の時間外勤務の合計が240時間以内である 84.4%	